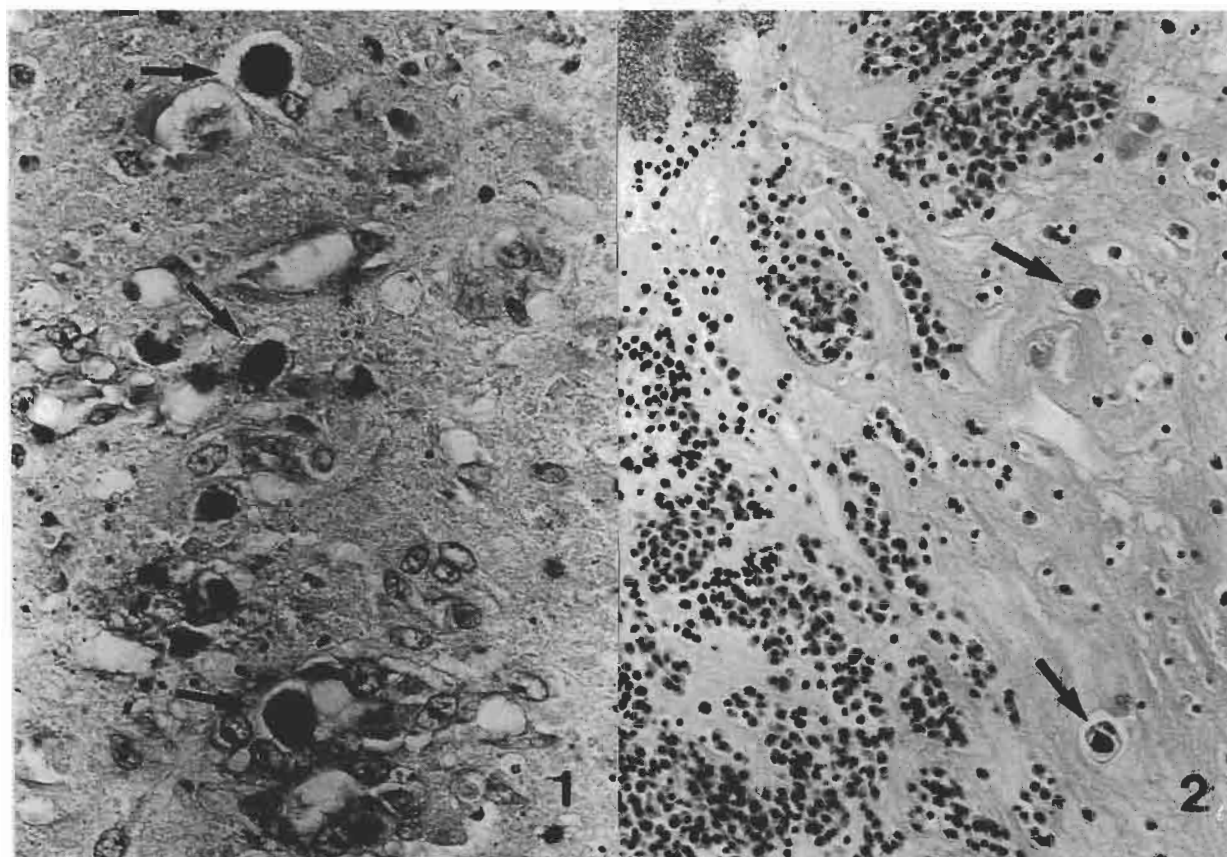


鶏の筋胃

家畜衛生試験場鶏病支場第四研究室出題 第33回獣医病理学研修会標本No.589



動物：鶏，卵用種，雌，70日齢。

臨床的事項：約7000羽の鶏群において60日齢から70日齢にかけて約40羽が死亡した。発症鶏は元気消失し，全身蒼白で，貧血を認めた。

剖検所見：全身の筋肉内出血，骨髓退色，ファブリキウス嚢及び胸腺の萎縮，肝臓の小白斑，脾臓及び腺胃粘膜の出血，筋胃粘膜の壊死を認めた。

微生物学的検査：肝臓から鶏貧血ウイルス及び鶏アデノウイルスが分離された。

組織所見：脱落しつつある壊死組織の下方に粘膜固有層に及ぶ粘膜の欠損が認められ，糜爛の状態であった。糜爛部では，表層から基底部にかけて胃腺上皮細胞に好塩基性の核内封入体が認められた（写真1，矢印，HE，×547）。これらの封入体は免疫組織学的染色及び電子顕微鏡による観察から鶏アデノウイルスにより構成されていることが示された。封入体を持つ核は腫大し，一部の封入体を持つ上皮細胞は粘膜から脱落していた。粘膜固有層の中では，上皮細胞が崩壊して封入体が残存しているものも認められた。また，筋胃腺の外側の間質には濃縮又は

崩壊した核や，細胞が崩壊して生じたと思われる好酸性の顆粒状の物質が認められた。さらに，出血や少数のリンパ球，偽好酸球の浸潤する部分も認められた。糜爛部を被う壊死組織の中には出血した赤血球や細菌塊，封入体を持つ上皮細胞などが含まれていた（写真2，矢印，HE，×350）。これらの封入体の中には好酸性に染色されるものも認められた。また，一部に心筋の増殖巣も認められた。筋胃糜爛部の下方の粘膜下組織及び筋層内にはリンパ球を主体とする単核細胞の浸潤が認められた。また，平滑筋線維の萎縮や線維芽細胞の増殖する部分も認められた。

考察及び診断：糜爛部の変性壊死に陥った上皮細胞や剝離した上皮細胞の多くに核内封入体が認められたことから，アデノウイルス感染が糜爛病変形成に関与していると考えられた。しかし，アデノウイルス感染が筋胃の糜爛形成の第一の原因であるかどうかは明かでなかった。従って，本例の組織の診断は「アデノウイルス性核内封入体を伴う鶏の筋胃糜爛」とした。